

目の冒険

錯視の話 ⑩

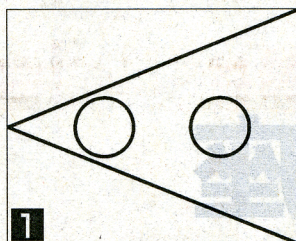
北岡 明佳

お盆のようなお月さま、という。東の空に出たばかりの満月は、お盆のように丸く、大きく見える。その大きく見えた月が夜半になって上の方に来ると小さく見える。

しかし、どちらも目に映った像の物理的大きさは同じである。そのため、この現象は月の錯視と呼ばれる。

ところが、である。月の錯視は、他の多くの錯視とはずいぶん違う。多数派の錯視の一例として、ポンゾ錯視を考えて

地表の月、大きいような…



みよう。

①では、同じ大きさに描かれた二つの円のうち、左の方が大きく見える。この錯視量を測定する時は、例えば右の円の大きさを基準として、左の円がどのくらい大きく見えるか測定すればよい。

い。このように、大きさの錯視の多くは、二つの対象の相対的な大きさ判断である。

一方、月の錯視の大きさ判断は、対象を1度につき1個しか見ることができないので、絶対的な大きさの判断となる。

その判断に及ぼす要因としては、体位による説明(垂直方向を見上げる姿勢の時、なぜか月が小

さく見えると考える)、視空間の異方性による説明(地平線に近づく方向は距離が過大評価されるので、月がより大きく見えると考える)、視野に入った空の比率による説明(天空にある月はまわりの空の部分が多くの

で、空との大きさの対比で小さく見えると考える)などがある。

②(筆者の合成写真)



のように、月を地上近くと天空の両方に置いてみよう。二つの月を同時に見れば同じ大きさであると思われるが、どちらかを隠して眺めると、地上近くの月は若く大きく、天空の月は若く小さく見える…ような気がする。しかし、誰にもなじみのある錯視だけに、読者の皆様これで満足して頂けるかどうか不安である。

(立命館大助教授)

① ポンゾ錯視

② 月の錯視(になるのかどうか…)